

慶紀逸と『武玉川』(二)

八塚一青

前稿で『武玉川』の特徴として、「七七」の短句が多いと書きました。一番初めに出された初篇を見てみると「五七五」の長句の掲載が二百九十五に対して、「七七」の短句が四百二十四となっており、掲載句の半分以上が短句となっています。『武玉川』はその後隆盛となる「川柳」とは微妙に異なり、あくまで「俳諧の付句集」という体裁のものであります。

俳諧では、五七五が詠まれ、その後に七七が付けられます。当時の俳諧師はトレーニングのためにこの付句をつける練習を行っていたそうです。丁度、毎月の滑稽俳句協会報の「今月の秀逸句」の中で、八木会長が「・・・七七をつけてみました」とされているものがまさに付句です。本来であれば、「俳諧で詠まれた句」の選集ですから、五七五とそれに対して付けられた七七をセットで載せるべきなのですが、紀逸は「事繁ければこれを略す」として、『武玉川』では片方のみを掲載する英断を行いました。「わずらわしいから略す」という単純な理由でしたが、後の川柳に大きな影響を与えます。

面白いのは、五七五・七七・五七五…と付け合わされた俳諧の中から紀逸が「秀逸」なものを選んだ結果、七七の短句の方が多くなったという事実です。実際、『武玉川』の真骨頂は「七七」短句にあります。

猫の二階へ上がる晴天

一人に見せる髪に半日

しゃぼん玉の門を出て行く

親のむかしを他人から聞く

今から二百五十年以上前に詠まれた句ですが、この爽やかで明るい詩情は一体なんのでしょうか。これらは、現代人が詠んだ「令和の自由律俳句」と言われても疑う人はいない、まさに普遍の句といえます。

そして、既に書きましたように、これらはあくまで付句ですから、この前にも後にもこの句に対応する五七五があったはずです。それらは残っていないので、前後にどんな句があったのかを想像することも、楽しみ方の一つです。

そして、ここで我々は句作の極意に触れることになります。それは、「付句したくなる句は良い句である」ということです。付句したくなる句は、余韻、余情が漂う句です。その目に見えない余韻、余情は、もしかすると「詩」と言ってもいいかもしれません。それを捉えようとして、詩人も俳人も言葉を紡ぎますが、なかなか捉えきれるものではありません。「詩」は、いつも逃げていってしまう、でも確かにそこにいたと感じさせるものです。

さらに「良い句は付きやすい」という特徴もあります。「猫の二階へ上がる晴天」などは、結構、なんでも付いてしまいます。前稿に引いた五七五の二句の隣にいても、あまり違和感がありません。

みどり子のあくびの口の美しき

猫の二階へ上がる晴天

背くらべ手をやわらかにさげている

猫の二階へ上がる晴天

二百五十年前、恐らく江戸にいた誰かが口ずさんだ「猫の二階へ上がる晴天」は、時を超えてもいろいろな幸せな場面に顔を出しては逃げていきます。